

平成24年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発

2 研究の概要

本研究は、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るために、幼稚園と小学校の教育課程の連続性を明確にすることを目的とする。本研究では、幼稚園教育と小学校教育を接続するための新分野創設及び接続カリキュラムと指導方法等の開発を目指すとともに、追跡調査により、接続カリキュラムによる幼稚園と小学校の教育の一貫性において、新分野の有効性を検証する。

具体的には、以下の方法等による。

- ① 「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10 視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化
- ② 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設
- ③ 幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定
- ④ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発
- ⑤ 研究実践による実践データの収集
- ⑥ 研究開発結果に対する検証・評価
- ⑦ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

3 研究の目的と仮説

（1）研究仮説

【現状の分析と研究の目的】

平成20年3月28日に告示された「幼稚園教育要領」において、「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」が明記され、幼児と児童、教員同士の交流が行われている。

しかしながら、幼稚園と小学校の連携に関しては、両者の教育内容・方法等への認識の違いから相互に意義のある交流がなされているとは言えない状況にある。また、教員同士の交流によって、互いの教育内容及び指導方法の違いや共通点について相互理解を深め、一貫性を持った教育課程の編成が必要であるが、これらに資するような幼稚園と小学校の教育課程が直接接続される実践研究が十分になされているとは言い難い状況にある。

そこで、本研究においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」として仮定し、幼稚園と小学校の教育課程の連続性を明確にすることにより、幼稚園教育と小学校教育とを接続するための新たな分野を設定するなど幼小接続カリキュラムの開発、編成を通じて、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を目指す。

本研究の遂行により、学校教育のはじまりとしての幼稚園教育が、小学校教育との関連で学校教育の体系に強固に位置付けられることが期待される。また本研究は、子どもの発達や学びの連続性が確保され、子ども一人一人が確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をより確かに身に付ける事へとつながるものとする。

なお、本園では、附属小学校及び附属中学校とともに平成12年度から平成14年度までの文部科学省研究開発学校指定研究を受け、幼稚園入園から中学校卒業までの子どもの学びの過程を整理し「学びの一覧表」を作成した。その研究過程において、幼小中12年間を見通した、子どもの学びを見取る共通カリキュラム（10視点カリキュラム：①自分の生き方、②人とのつながり、③健全なからだ、④感動の表現、⑤自然との共生、⑥文字とことば、⑦ものと現象、⑧数とカタチ、⑨豊かな暮らし、⑩世の中のしくみ）を作成し、その実践を深めてきている。これらの実践研究の成果の継続性を確保し活用することは、幼稚園教育と小学校教育の接続に焦点をあてた研究を更に深化・発展させ、また、そこで得られる数々の成果を実証するために必要不可欠であると考えている。

なぜなら、現在の本園のカリキュラムは、幼稚園教育要領の5領域よりもさらに詳細な「10視点」を基に編成しており、この「10視点」を用いて幼稚園教育と小学校教育のつながりや構造を分析することで、幼小それぞれの教育内容の接続に関する課題が明らかにできると考えるからである。これまでの研究実績を踏まえて、「10視点カリキュラム」の「10視点」及び「下位項目」を基本とした上で、本研究において、子どもの実態や発達の過程と再度照らし合わせることで見直しを図り「新分野」として設定する。「10視点カリキュラム」の「下位項目」は40を数えており、これを基に設定する「新分野」は、幼児期の子どもにねらうべき教育内容を幼稚園教育要領の5領域よりも詳細に示すものとなる。

また、幼稚園教育と小学校教育の「接続期」を子どもの実態から設定し、「接続期」に特有に見られる“ねらい”や“指導方法”の特徴を「10視点カリキュラム」を用いて整理照合することで、接続期のカリキュラム（以下「接続カリキュラム」と呼ぶ）を開発できると考えている。接続カリキュラムは、接続期の子どもにふさわしい教育

の内容と方法を示すものであり、幼稚園教育の3～5歳の学び方から、小学校教育の6歳以降の学び方へと、子どもにとって自然な形で学び方が移行することを可能にするカリキュラムであると考え。そのためには、幼稚園の年長から小学校低学年にかけての「接続期」の節目をより明確にしていく必要がある。本研究においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」として仮定するが、接続カリキュラムの開発を通して、より詳細な「接続期」を明らかにしたいと考える。

以上、本研究において幼稚園と小学校の教育課程の連続性を明確にし、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続についての研究開発を行うことにより、幼稚園教育要領の改訂及び、幼稚園教育並びに小学校教育の深化・発展に資することができる。と考える。

【研究の過程】

具体的な研究の過程は以下のように考えている。

① 「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化

幼稚園教育と小学校教育との連携、接続に関する先行研究の収集・分析を踏まえて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を整理し、それぞれの相関関係を明らかにした上で、接続に焦点を当てた分析研究を行う。

② 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設

保育実践の中で子どもの事実を基に見とった子どもの学びから“ねらい”を評価し、修正し直した月別の指導計画から、遊びや生活の場面別、「10視点」別に取り出した“ねらい”を、3歳（年少）から5歳（年長）までの3年間を並べ、つながりの中で検討することで「新分野」を創設する。

③ 幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定

「接続期」に特有に見られる遊びや生活の場面を抽出した上で、それらの“ねらい”や“指導方法”の特徴を「10視点カリキュラム」を基に創設した「新分野」を用いて整理するとともに、小学校との連携を図り、詳細な「接続期」を明らかにする。

④ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発

②及び③における研究結果を踏まえ、「接続期」の子どもの発達に応じた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材を工夫した実践を構想する。

⑤ 研究実践による実践データの収集

④で開発した指導方法及び教材を用いた研究実践を行い、その研究実践から「接続カリキュラム」の検証に向けた実践データを集積する。

⑥ 研究開発結果に対する検証・評価

⑤で収集した実践データ及び①で得られた分析結果を基に、「新分野」の有効性及び「接続カリキュラム」の指導方法及び教材について検証・評価を行う。その結果に応じて、「接続カリキュラム」の再設定等に取り組む。

⑦ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

附属小学校との連携により「接続期」の実践データを継続して収集し、「接続カリキュラム」を実施した本園を修了した子どもと外部から入学した子どもとのデータを比較することにより、「新分野」及び「接続カリキュラム」の有効性を検証する。

【予想される研究成果】

本研究開発による実践を通して、次のような成果が得られると考える。

- ① 幼小連携・接続に関する教員の意識を高め、理解を深めるための基本的な資料の提供とともに、「小学校学習指導要領」と「幼稚園教育要領」における教育課程上の接続を明確にする実践成果を得ることができる。
- ② 「接続カリキュラム」を通して、幼稚園における教育の成果を小学校に円滑につなげていくことにより、主体的に学ぼうとする態度の育成及びいわゆる小1プロブレムの解決に資することができる。
- ③ 「新分野」及び「接続カリキュラム」を創設、構想、実践することを通して、幼小接続期の子どもの学びを支える教諭像を見出すことができる。
- ④ 子どもの追跡調査によって、「接続カリキュラム」による教育の一貫性について、「新分野」の有効性を

証明できる。

- ⑤ 研究発表会等を通して、幼稚園教育と小学校教育のつながりや「接続期」における指導の在り方について、地域の幼児教育関係者及び小学校教員等との相互理解を深めるとともに、保護者の理解を深め、より一層の連携・協力を推進することができる。

(2) 教育課程の特例

なし

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

本研究では、詳細な観点をもつ教育課程を編成した。これは、「10 視点」、40 項目の「下位項目」の妥当性を検討しつつ、実践で確かめた指導計画を基にして「下位項目」毎に子どもの実態や発達の過程に基づいたねらいを編成した教育課程である。開発した「10 視点」及びその定義は次に示す通りである。

視点名	視点の定義
自分の生き方	様々なかかわり合いの中で、自分を見つめ、したいことやすべきことを自分で決め、よりよい生き方を目指そうとする
人とのつながり	人とかかわることを通して、他者の思いや考えに気付き、よりよい関係をつくろうとする
健全なからだ	自他のからだの成長や変化に気付き、めあてをもって健康なからだづくりに取り組む
自然との共生	豊かな自然体験を通して、その美しさや不思議さに触れる中で、自然や生き物に興味・関心をもち、望ましい自然観・生命感を養う
ものと現象	ものがもつ性質やものとの関係のなかで起こる現象に対して、原因を考えたり確かめようとしたりする
感動の表現	多様な表現や文化のよさを感じ、イメージをふくらませ、自分らしく表現しながら豊かな感性を養う
文字とことば	音声言語や文字言語に触れ、語彙を増やし、思いや考えを伝え合う
数とかたち	量やかたち、空間を感覚的にとらえたり、身の回りの事象を数理的に判断したりする
豊かなくらし	喜んで食べたり、伝統行事に触れたり、道具や素材を使ったりして、自分たちのくらし(遊びや生活)をよりよくするための方法について考えたりしてみたりする
世の中のしくみ	自分たちのくらし(遊びや生活)を支えるものについて知ったり、きまりごとの意味やものを大切に使う使い方を考えたりする

「10 視点」は右に示す概念図のとおり、構造化を図った。「自分の生き方」及び「人とのつながり」を核とし、他の8視点をその周りに位置付けた。

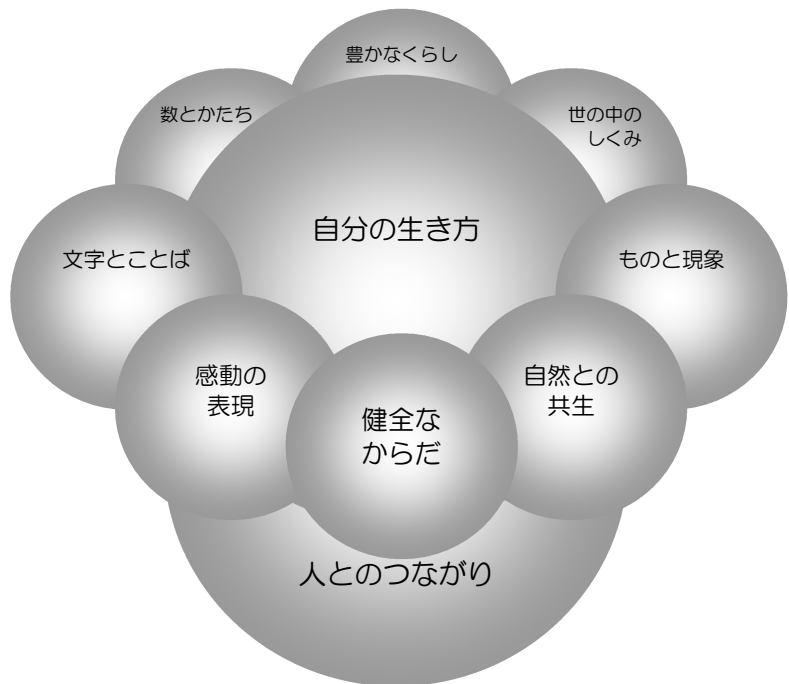
子どもは幼稚園での遊びや生活を通して様々なことを学んでいる。ある遊びや生活を取り出し、それらを分析的に見た時、私達は、「10 視点」の中のいくつかの視点に関する学びを見て取ることができる。

中でも「自分の生き方」及び「人とのつながり」は、いずれの遊びや生活を取り上げても、必ず子どもの学びを見て取ることができる視点である。即ち遊びや生活の場面に左右されないことのない視点であり、他の視点とは一線を画する視点であると考えている。

ただし、その他の8視点も遊びや生活によって学びの見取りやすさに差異が見られるものの、子どもの学びを捉える時には重要な視点であることには変わりはない。

そこで、「自分の生き方」及び「人とのつながり」を核とし、それらが他の8視点とも相互に関連していることを表現した。

「10 視点」、「40 の下位項目」毎の「入園から修了までのねらい一覧」は報告書に示す通りである。



(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>第一年次は、45回の園内研究会、7回の拡大研究会、2回の運営指導委員会を実施、以下の研究を実施した。</p> <p>① <u>「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化</u> 幼稚園教育と小学校教育との連携、接続に関する先行研究の収集・分析を踏まえて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を整理し、それぞれの相関関係を分析した。その結果、「10視点カリキュラム」のより詳細な観点である「下位項目」を用いて再度分析をし直すことで、より三者のねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を整理できる見通しをもつことができた。「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造の整理実現のために、本園の教育課程を「10視点カリキュラム」の「下位項目」毎に編成することに着手した。</p> <p>② <u>子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設</u> 「10視点カリキュラム」と「幼稚園教育要領」の各領域のつながりや構造を示す際には、「10視点カリキュラム」の「10視点」の「下位項目」毎のねらいが必要であることが明らかになった。このことに伴い、本園の教育課程のねらいを「10視点カリキュラム」の「下位項目」毎に編成することに着手した。「10視点」の「下位項目」は合計すると全部で42存在するが、その全ての検討を終え、最終40となった一つ一つの「下位項目」において、3歳から5歳までの発達に基づくねらいを編成し、分野創設の準備を進めた。</p> <p>③ <u>幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定</u> 本研究においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」として仮定し、「接続期」特有に見られる発達の諸側面を明らかにするとともに、実践を通して、子どもの発達に即した「接続期」をも明らかにしようと考えた。 一年次は、仮定した「接続期」の妥当性について確かめた。そこで得られた課題については、幼稚園の教師だけの捉えに偏ることがないように、附属小学校と合同で実施した「5・6歳の合同単元学習」を通して、幼・小の教師がともに子どもの学びを捉えることにより、発達の節目の位置を確かめた。 今後、各年齢と各時期の実践を分析することで、子どもの発達に即したさらに詳細な「接続期」を明らかにするために、一年次は、それぞれの時期の保育実践の整理・構造化に着手した。</p> <p>④ <u>「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発</u> 「一人一人の子どもが、自分の或いは友達と共通の目的に向かって自分の力を発揮し、挑戦を繰り返したり友達と創り上げたりする遊びや生活のまとまり」に注目し、遊びや生活の場面からそれらを抽出し、単元計画として試行的実践を通して、整理・構造化を行った。</p>
第2年次	<p>第二年次は、40回の園内研究会、8回の拡大研究会、2回の運営指導委員会を実施、以下の研究を実施した。</p> <p>① <u>「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化</u> 「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10視点カリキュラム」の三者について、ねらい・目標及び内容におけるつながりや構造の整理のために、「10視点カリキュラム」のより詳細な観点である40項目に及ぶ「下位項目」毎の教育課程を編成した。そして、「10視点カリキュラム」のより詳細な観点である「下位項目」を用いて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」とのねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を再度分析・整理し直した。</p> <p>② <u>子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設</u> 教育課程のねらいを「10視点カリキュラム」の「下位項目」毎に編成した。「10視点」の「下位項目」は全部で40項目となり、その40項目すべてについて検討を終え、一つ一つにおいて、3歳から5歳までの発達に基づくねらいを編成した。さらに、前述したように、「10視点カリキュラム」の「下位項目」を用いて「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」とのねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を分析・整理し直した。その結果、「新分野」とは、「10視点カリキュラム」に見る「10視点」であり、「40の下位項目」に相当すると構想するに至った。</p> <p>③ <u>幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定</u> 二年次は、各年齢と各時期の実践を分析することで、子どもの発達に即したさらに詳細な「接続期」を明らかにするため、それぞれの時期の保育実践の整理・構造化を進めた。</p> <p>④ <u>「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発</u> 二年次は一年次に整理・構造化を行った「遊びや生活のまとまり」を新たに編成した「40の下位項目」をもつ「10視点カリキュラム」によって整理し直すとともに、新しく見出した「遊びや活動のまとまり」についても整理・構造化を行い、それらの分析に着手した。</p> <p>⑤ <u>研究実践による実践データの収集</u> 一年次に整理・構造化を行った「遊びや生活のまとまり」と、新しく見出した「遊びや活動のまとまり」を取り上げ、新たに編成した「40の下位項目」をもつ「10視点カリキュラム」によって整理・構造化を</p>

	<p>行い、実践データを集積した。そして、それらを生かして、「接続カリキュラム」に見直しをかけた。</p> <p>⑥ <u>研究開発結果に対する検証・評価</u> 三年次の実施に向けて、データを集積した。</p> <p>⑦ <u>接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証</u> 本園を修了して進学した子どもと外部から入学した子どもを比較するための質問紙調査を「10 視点カリキュラム」の5歳修了時点のねらいを基にして作成した。附属小学校との連携により、保護者及び1年生担任に質問紙調査を実施した。また、1年生担任に対しては、入学から夏休みまでの4ヶ月間の子どもの姿と、必要に応じて行った一人一人への配慮について聞き取り調査を実施した。</p>
第3年次	<p>第三年次は、37回の園内研究会、7回の拡大研究会、2回の運営指導委員会を実施、以下の研究を実施した。</p> <p>① <u>「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」及び「10 視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係を明確化</u> 二年次に編成した教育課程に見直しをかけ、実践を通して一部を修正するとともに、修正箇所については改めて、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」とのねらい・目標及び内容におけるつながりや構造を分析・整理し直した。</p> <p>② <u>子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設</u> 二年次の構想を受け、『神戸大学附属幼稚園プラン』の創造を進める過程において、「新分野」とは、「10 視点カリキュラム」の「10 視点」及び、「40 の下位項目」であると結論付け、本園が考える幼児教育の中身を説明する新たな枠組みとして位置づけた。</p> <p>③ <u>幼稚園と小学校の教育課程を円滑に接続するための詳細な「接続期」の設定</u> 三年次は、詳細な「接続期」を設定するために、小学校教育への接続の観点から抽出した保育実践を分析し、接続期の教育として特徴的であり、特に重点をかける下位項目を見出した。それらの下位項目の5歳修了時のねらいが始まる時期を手がかりに、幼稚園における接続期は9月から11月頃にかけて緩やかに始まると設定した。</p> <p>④ <u>「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発</u> 二年次までの試行的実践を整理・構造化した単元を分析することで、幼稚園教育と小学校教育を接続する観点から子どもに育つことを期待する力を育む指導方法及び教材に欠かせない要素のいくつかを見出した。5歳児の1学期には、単元の分析により見出した知見を生かすべく、いくつかの子どもたちの活動において開発した指導方法及び教材を試行的に実践し、その効果を確認した。2学期以降は、開発した指導方法及び教材の効果の検証・評価を行うとともに、引き続き「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発に努めた。</p> <p>⑤ <u>研究実践による実践データの収集</u> 二年次に見直した「接続カリキュラム」の実践により開発した指導方法及び教材を用いて、その効果の検証・評価を行った。</p> <p>⑥ <u>研究開発結果に対する検証・評価</u> 三年次の実施に向けて、データを集積した。</p> <p>⑦ <u>接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証</u> 二年次に引き続き、本園を修了して進学した子どもと外部から入学した子どもを比較するための質問紙調査を「10 視点カリキュラム」の5歳修了時のねらいを基にして作成した。附属小学校との連携により、保護者及び1年生担任に質問紙調査を実施した。また、1年生担任に対しては、入学から6月までの2ヶ月間の子どもの姿と、必要に応じて行った一人一人への配慮について聞き取り調査を実施した。 さらに、小学校の成績の評価項目に関して、本園を修了して進学した子どもと外部から入学した子どもを比較する追跡調査を実施し、検証を行った。</p>

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>運営指導委員会にて以下の事項について評価を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「教育要領」、「指導要領」及び「10 視点カリキュラム」の相関関係の明確化 ・ 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための「接続期」の設定 ・ 教育課程の連続性を明確にするための新たな分野の創設 ・ 新たな分野を踏まえた指導方法及び教材の研究開発
第2年次	<p>運営指導委員会にて以下の事項について評価を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「教育要領」、「指導要領」及び「10 視点カリキュラム（下位項目毎）」の相関関係の明確化 ・ 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設 ・ 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための「接続期」の設定 ・ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発 ・ 研究実践による実践データの収集 ・ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

	<p>国内外の保育研究者に本園教育課程を紹介し、評価を受けた 1年生保護者(5月)、幼稚園年長時担任(6～7月)、小学校1年生担任(8月)による子どもの追跡調査を実施した 小学校1年生担任による入学時から夏休みにかけての子どもの様子や担任の一人一人への配慮等に関する聞き取り調査(7月)を実施した</p>
第3年次	<p>運営指導委員会及び研究発表会にて以下の事項について評価を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「教育要領」、「指導要領」及び「10視点カリキュラム(下位項目毎)」の相関関係の明確化 ・ 子どもの事実と学びに基づく「新分野」の創設 ・ 幼稚園と小学校の教育課程を接続するための「接続期」の設定 ・ 「新分野」を踏まえた「接続カリキュラム」における指導方法及び教材の研究開発 ・ 研究実践による実践データの収集 ・ 接続カリキュラムを踏まえた、子どもの追跡調査の実施と検証

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 子どもへの効果

子どもへの効果については、客観的な数値で表せるよう、「10視点カリキュラム」に基づく本園教育課程の、5歳修了時のねらいを基に47の評価項目を作成し、研究開発第一年次と第二年次の年長児を対象に、保護者及び小学校1年生担任の協力を得て、子どもの追跡調査を行った。

保護者による評価については、研究開発第一年次の年長児が小学校入学後(平成23年4月28日)に調査を行い、内部進学者と外部進学者との比較を行った。その結果、両者との間に有意な差が見られるとは言えなかった。第二年次については、小学校入学前(平成24年2月29日)に、平成24年度神戸大学附属小学校新1年生になる保護者全員にアンケートを配布し、協力を求めた。第一年次よりも調査時期を早めたのは、幼稚園修了時期の子どもの姿について、保護者の記憶がより鮮明な間に調査をすることが、より正確な評価につながると考えたからである。調査の結果、一年次と同じく、両者との間に有意な差が見られるとは言えなかった。要因としては、保護者が我が子について評価を行ったことで評価者の評価基準にばらつきがあったことが考えられる。

小学校1年生担任による評価については、入学時から夏休みにかけての子どもの様子や担任の一人一人への配慮等に関する聞き取り調査や、保護者と同様の評価項目による質問紙調査、1年生の成績を総合して、子どもへの効果を確かめようとデータを集めた。

小学校の成績による評価については、小学校の評価項目に基づいて、平成23年度小学校1年生の成績を得点化した。その結果を、内部進学者と外部進学者とに分け、その平均値と標準偏差(S.D.)を算出し、さらに項目毎に対応のないt検定を実施した。その結果、両者との間に有意な差が見られるとは言えなかった。

入学時から夏休みにかけての子どもの様子や担任の一人一人への配慮等に関する聞き取り調査からは、1年生に進学した当初の子どもの姿や、一人一人の課題を小学校の教師がどういった観点から捉え、捉えた課題にどのように対応しているのかといった情報を得ることができた。しかし、これらから、子どもへの効果を見出すには至っていない。

保護者と同様の評価項目による小学校1年生担任への質問紙調査では、保護者が評価したものと同様の47項目に基づいて、平成23年度及び平成24年度の小学校1年生担任にも児童一人一人を評定するように求めた。その結果を、内部進学者と外部進学者とに分け、その平均値と標準偏差(S.D.)を算出し、さらに項目ごとに対応のないt検定を実施した。その結果を年度別に以下に示す。

<平成23年度>

有意差が見られた項目($p < 0.05$)を取り上げると、「自分のすべきことをしたり、した方がよいと思うことを自分からすすんでしたりする」という項目において、外部進学者よりも内部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、内部進学者の「自立性、主体性(したいことやすべきことを自分で決め、自ら行動を起こしている姿)」が高いことが明らかにされた。

また、差のある傾向が見られた項目($p < 0.10$)に着目すると、内部進学者の平均値が高い項目と外部進学者の平均値が高い項目が得られた。「家族や友達のことを考えて、人のためになることをする」「家族や友達を手伝ったり助けたり一緒にしたりする」「新しい環境の中でも(なんとか)落ち着いている」という項目では、外部進学者よりも内部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、内部進学者の「他者への共感性、向社会的行動、自律性(他者の思いや考えに気付き、よりよい関係を作ろうとしている姿など)」が高いことがうかがえる。これに対し、「歌詞の意味や状況に合わせて楽しく歌ったりしっとり歌ったりする」「目にした現象を話したり、その原因と結果を結びつけて考えて話したりする」という項目では、内部進学者よりも外部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、外部進学者の「音楽表現への意欲、現象と因果関係への関心・理解」が高いことがうかがえる。

以上から、自己と他者との関係性を中心とした領域の発達においては内部進学者が優れており、表現や環境(現象)への積極性に関する領域の発達においては外部進学者が優れていると言えるが、このような差異が生まれた要因については、慎重に検討する必要があると考える。

<平成 24 年度>

有意差が見られた項目 ($p < 0.05$) を取り上げると、「人の気持ちを聞いたり周りの状況を見たりして、自分勝手なことを言わない・しない」、「新しい環境の中でも (なんとか) 落ち着いている」という項目において、外部進学者よりも内部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、内部進学者の「協調性、自律性 (人の気持ちを聞いたり周りの状況を見たりして自ら判断し、自分の行為を主体的に規制している姿)、向社会的行動」が高いことが明らかにされた。これに対し、「場に応じた言葉を使う」という項目において、内部進学者よりも外部進学者の方に、より子どもの育っている姿が確認された。ここから、外部進学者の「状況に応じた言葉の使い分けに関する理解」が高いことが明らかにされた。

また、差のある傾向が見られた項目 ($p < 0.10$) に着目すると、「家族や友達のことや言ったことを喜んで話したり、怒って訴えたりする」という項目では、内部進学者よりも外部進学者の方に、より多く見られることが確認された。ここから、外部進学者の「他者に対する興味・関心」が高いことがうかがえる。しかしながら、この項目については、外部進学者の「友達とトラブルが起こったときに、子ども同士で解決しにくい姿」が確認されたとも言える。ここから、内部進学者の「自主性 (他者との問題を自分で解決しようとしている姿)、自立性」が高いことがうかがえる。

以上から、自己と他者との関係性を中心とした領域の発達においては内部進学者が優れており、「状況に応じた言葉の使い分けに関する理解」においては、外部進学者が優れていると言えるが、このような差異が生まれた要因については、慎重に検討する必要があると考える。

平成 23 年度と 24 年度の結果を合わせて見ると、どちらの年度においても共通して、自己と他者との関係性を中心とした領域の発達においては内部進学者が優れていることが明らかになった。このことから、視点「自分の生き方」、「人とのつながり」を基軸にしたカリキュラムの有効性が、小学校 1 年生の子どもの姿を小学校の担任が行った評価結果によって検証されたと言える。

② 教師への効果

新しい教育課程は、「10 視点」及び「40 の下位項目」があり、詳細な観点毎に子どもが育っていく道筋を思い浮かべることができる。我々が保育を計画する際に欠かせないものであり、実践を通して子どもの事実を基に改善を繰り返すことができるものである。実際に、本研究の間にも、子どもの事実を基に発達の節目を新たに設定したり、発達の節目の位置を変更したりするなどの改善をしてきている。

教育課程の改善を可能にしているのが、新しい指導計画であり、新しい指導計画は、遊びや生活の場面毎に、「10 視点」及び「40 の下位項目」毎にねらいを計画している。このことにより、遊びや生活の場面毎に、より一層ねらいの方向を明確に意識して保育するようになった。同時に、子どもの学びを詳細な観点で捉えられるようになってきている。さらに、「視点」及び「下位項目」と「遊びや生活の場面」の関係を一目で見られるように表していることにより、「それぞれの視点及び下位項目のねらいをどのような遊びや生活の場面において計画しているのか」や「ある遊びや生活の場面において、どの視点及び下位項目のねらいを計画しているのか」という見方が容易にできるとともに、遊びによるねらいの偏りや傾向が分かり、意識して計画・実践するようになった。

また、全員の教師が単元計画を作成し、実践してきた。この取組を通して、単元として取り出した遊びや生活をいくつかの大きさの活動レベルで捉え、それらの活動の流れを予想して整理しておくことで、単元全体を見渡した上での今を教師は単元展開中、常に自覚する経験をしてきた。

このような考え方は、経験豊かな優れた保育実践者であれば、感覚的に行っているであろうと考える。我々は、そのような保育者実践者に一刻も早く近づきたいと考えている。同時に、本園教育課程と指導計画である「神戸大学附属幼稚園プラン」を創造し、活用し、改善することを通して、「神戸大学附属幼稚園プラン」は、教師が成長するための道具として有効に働いていることを実感している。経験豊かな優れた保育実践者が感覚的に行っていることを、我々は、「神戸大学附属幼稚園プラン」を創造し、活用し、改善することで自覚的に行おうとしている。

なお、詳細については、本園の 4 人の教師 (教師経験が、4 年、6 年、9 年、12 年) が具体的な事例を挙げて報告書の本文に示す。

③ 保護者等への効果

研究課題及び研究内容について、保護者の理解と保護者からの協力が得られるように、第二年度の 5 月に研究説明会を実施した。また、第三年度の 1 月には、3 年間の研究報告会を実施した。研究説明会と研究報告会の直後にアンケート調査を実施した。質問項目は、「附属幼稚園の研究は意義がある」「附属幼稚園のカリキュラムは小学校教育との接続が工夫されており特色がある」「附属幼稚園のカリキュラムは理解しやすい」「附属幼稚園のカリキュラムに満足している」「附属幼稚園は研究やカリキュラムについて分かりやすく伝えている」「附属幼稚園の研究に必要な協力をしたい」の 6 つであった。選択肢は、「そう思う」「ややそう思う」「あまり (そう) 思わない」「まったく (そう) 思わない」の 4 つであった。第二年度における回答分布が第三年度になってどう変化したかを項目ごとに確認し、その傾向を全体的に考察・整理する。

まず、「附属幼稚園の研究は意義がある」と「附属幼稚園の研究に必要な協力をしたい」の 2 項目に関しては、第二年度当初より肯定的な回答をする保護者が多く (いずれも 90%以上が肯定)、その天井効果により、第三年度において顕著な変化が見られず、また、否定的な方向に回答が変化しているわけでもない。したがって、ほとんどの保護者は、カリキュラム研究の開始時も終了時も、附属園での研究に意義があると捉えており、その推進に対してできる限りの協力を惜しまないという構えを持っていると判断できる。

次に、「附属幼稚園のカリキュラムは小学校教育との接続が工夫されており特色がある」に関しては、「そう思う」が17ポイント程度上昇し、「ややそう思う」が10ポイント程度下降している。ここから、詳細な観点のカリキュラムが新しく編成されたことによって、カリキュラムにおける幼少接続の工夫への理解が深まった保護者が一定数いることが看取できる。しかし、第三年次終了時点でも、「ややそう思う」の割合が全体の3分の1程度となっており、接続の工夫や特色が十分に保護者に伝わったとは言えない。

「附属幼稚園のカリキュラムは理解しやすい」に関しては、「そう思う」が8ポイント程度上昇し、「ややそう思う」が3ポイント程度下降している。ここから、詳細な観点のカリキュラムが新しく編成されたことによって、カリキュラムについての理解を深めることのできた保護者が少数ながらいることが看取できる。しかし、第三年次終了時点でも、「ややそう思う」の割合が全体の約40%、「あまり思わない」の割合が全体の約5%となっており、附属園のカリキュラムは6割程度の保護者にとっては理解しやすいものの、すべての保護者にとって理解しやすいものではなかったと言える。

「附属幼稚園は研究やカリキュラムについて分かりやすく伝えている」については、「そう思う」の比率がほとんど変化せず、「ややそう思う」の比率が4ポイント程度増加している。また、「あまり思わない」は3ポイントほど減ったものの、4.5%の保護者は否定的に評価している。ここから、全体の6割程度の保護者には附属園の研究内容やカリキュラム内容は十分伝わっているものの、必ずしもすべての保護者に十分に伝わっていなかったと言える。

最後に、「附属幼稚園のカリキュラムに満足している」については、カリキュラムの工夫や特色の認知、カリキュラムの分かりやすさ、カリキュラムの理解しやすさの結果を反映して、「そう思う」の比率が約61%から約64%へ、「ややそう思う」の比率が33%から約34%へと、ほとんど変化していない。つまり、保護者のおおむね3分の2は十分に満足しているものの、約3分の1の保護者は、附属園のカリキュラムについて必ずしも十分に満足していないことが読み取れる。

項目毎の詳細な変化については、報告書の本文に示す。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

本研究開発においては、5歳（幼稚園年長）から6歳（小学校第1学年）を「接続期」と仮定し、「接続期」特有に見られる発達の諸側面を明らかにするとともに、実践を通して、子どもの発達に即した「接続期」をも明らかにしようと考えた。「接続期」の発達の諸側面と詳細な「接続期」の始まりの時期については、幼稚園の子どもの事実を基にした教育課程を用いて特定することができた。しかしながら、小学校における「接続期」の終わりの時期については、特定するには至っていない。子どもの評価等で、附属小学校から協力を得ているものの、本研究開発は、幼稚園が単独で受けているため、詳細な「接続期」の終わりの時期を特定することは非常に困難であったためである。子どもの事実を基に接続期の終わりを設定するためには、幼稚園と小学校が共に研究開発学校の指定を受けた上で、研究開発を行う必要があると考えている。そうすることで、幼稚園のみに留まらず、小学校における接続カリキュラムを示すことができると考える。さらには幼小9年間を一体として捉えたカリキュラムを示すことを目指していきたい。

また、研究開発においては、子どもへの効果についても客観的な数値で示すことが求められている。前述したように、様々な評価方法を考え試行錯誤してきた。期待している結果が得られなかった評価方法についても、運営指導委員や研究協力者の先生方からは、「評価方法を開発する意味において重要な取組である」と評価をいただいている。また一方で、もっと長期的な評価の必要性も示唆いただいた。具体的には、「幼児期の教育によって培った力が小学校中学年から高学年においてどのような影響を及ぼすのか」といったことである。これらについては、3年間の研究開発学校の指定期間内では限界があり、今後、附属小学校と共に継続した縦断的な研究を進める必要があると考えている。